ワイン用ブドウ栽培からつないでゆく復興・再生の風景づくり
－地震・津波・原発事故による複合災害地における景観・顔づくりへの挑戦

Landscape creation of restoration and regeneration from wine grape cultivation: Challenge of landscape and face creation in a complex disaster area caused by earthquakes, tsunamis and nuclear power plant accidents

遠藤　秀文　*Shubun ENDO*
株式会社ふたば／株式会社ふたばラレス

1．はじめに

とみおかワイナリーのある福島県双葉郡富岡町は，浜通り地方のほぼ中央部，そして8町村からなる双葉郡の中心部に位置する。同町は福島第一原子力発電所（以下，1F）および福島第二原子力発電所（以下, 2F）に挟まれている。2011年3月11日に発生した東日本大震災では，福島県で震度6強を観測し，1Fには約15.0mの津波（福島県内の最大津波痕跡高は富岡町沿岸部21.1m）が襲来して甚大な被害を受けた地域である。また，JR常磐線富岡駅より北に約9㎞の1Fでの事故の影響により，震災翌日3月12日早朝に1Fから半径20㎞圏内に避難指示が出され，約16,000人の全町民が避難を余儀なくされた。その日から2017年4月1日までの約6年間，同町への立入りが制限され，世界で前例のない地震・津波・原発事故，いわゆる複合災害による長期避難からの復旧・復興を目指さなければならない地域となった。それ以降，同町は物理的にも心理的にも「空白」となり，復興に向けた道筋が見えない状態に置かれた。復旧工事の進展と避難指示解除によってインフラは徐々に戻ってきたが，長期間の避難により“人が戻らない”，“働く場所がない”，“風景がない”など生活する上で不可欠な課題が浮き彫りとなった。「何を取り戻すのか」，「どんな未来の姿を描くのか」という問いが，復興の根幹として立ちはだかった。このような状況の中，津波で全て失った富岡駅東地区の土地に，畑をつくり，ブドウを植え，ワインをつくる，そして人の心を前向きにする風景づくりという挑戦が始まった。

2．富岡町における震災からの復興そして課題

震災前，富岡町は約16,000人が生活し，農業・漁業・商工業がバランスよく存在する地域であった。しかし，複合災害により町は長期の全町避難となり，町内人口は震災後約6年間にわたりゼロとなった。除染による環境回復とインフラ整備は進んだが，住民帰還は思うように進んでいない。同町の主な課題としては，以下の点が挙げられる。

（1）帰還率の低迷と生活の再建

2025年10月現在の町内居住者数は2,696名であり，県内避難者が6,831名, 県外避難者が1,547名となっている。避難指示解除後の帰還率は2025年10月時点で約6%（震災時富岡町に居住していた住民の帰還者は約1,000名）と著しく低く，町内居住者の半数以上は震災後の移住者となっている。帰還率が低い要因としては，①生活再建の見通しの不透明さ, ②就労機会の不足, ③地域コミュニティーの分断が挙げられる。

（2）津波被災地の「空白」と風景喪失

富岡駅周辺かつJR常磐線東側の沿岸部は，津波で全ての風景と文化を失い，災害がれきの仮置き場，焼却施設が設置された。その後災害危険区域に指定され，住居の再建が出来ず，大規模な更地が残されていた。これは，単なる景観の問題ではなく，地域の誇りや記憶の喪失（空白の風景）を意味している。

筆者は1971年に富岡町に生まれ，大学卒業後に大手建設コンサルタントに就職し，長年20数か国の途上国でODA事業に携ってきた。その間，欧州，オセアニア地域の文化にも触れる機会があった。2007年8月（震災の3年半前）の35歳の時に帰郷し，長年の海外での経験からワインの風景と文化を富岡町に根付かせたいという気持ちを抱いたまま震災を経験した。完成して6か月の初めてのマイホームは津波で流され，翌日に原発事故で故郷を離れざるをえなかった。震災前に富岡町にワインの文化を考えたのは，海山川の自然と食のポテンシャルが高かったからである。夏は清涼，冬は温暖で生活しやすい自然環境を有しているにも関わらず，それぞれが点の状態で，観光や交流人口が乏しいことに疑問を抱き，ワインの風景と文化を地域に根付かせて，“点”と“点”を結び，“線”から“面”へと付加価値を高めたいと考えていた。震災後の2015年頃から，富岡駅前のこの「空白の風景」をどのように未来につないでいくか熟慮した結果，震災前に構想していた，“100年先を見据えたワインの風景と文化の形成”を選択した。

3．ワインづくりを通じた地域・復興そして再生の意義

ワイン産業は 農業 × 加工 × 観光 × 学び・交流 が連動する複合的な産業である。ブドウを植えることは，単なる農作業ではなく，長期的にその土地に関わり続ける意思表明でもあり，地域に根付かせ，文化を醸成することでもある。いわゆる，『テロワール』という視点が重要である。ワインづくりを通しての地域再生の意義として，以下の 4 点を挙げる。

（1）復興の「象徴的な風景」の創出

ブドウ畑は，四季を通じて変化する景観を生み出す。荒廃した土地が時間をかけて緑に覆われていくプロセスそのものが，地域住民や来訪者にとって大きな希望となる。

（2）長期的な視座と復興のプロセスとの親和性

ブドウ栽培は，①土づくり，②苗の管理，③収穫と積み重ねが必要であり，年月とともにその品質と熟度が深まってくる。この“信念を持ち続けて時間をかけるコンセプト”そのものが，復興のプロセスとの親和性を有する。

（3）地域に雇用と産業を生む

ワインづくりには長期的な人材育成が不可欠であり，地域に「働く理由とまちを再生する思いの醸成」を生みだす。

（4）関係人口を惹きつける魅力

ワイナリーは農業の中でもデザイン性・クリエイティビティの追及が求められる分野であり，地域内外からの関心を生みやすい。ワインづくりは「復興」から「再生」，さらに「発展」へと向かう潜在力を有している。

4．津波被災域におけるワインの風景づくり

津波被災域は，長期間「更地のまま」という状態が続き，雑草が繁茂し，土地が更に荒廃していった。駅前は住民にとって町の顔であり，初めての訪問者にとって第一印象を抱くシンボルの場であり，その「顔」をどのように形成するかが非常に重要である。とみおかワインは，この空間にブドウ畑を配置し，「地域の誇りとなる風景を再生」することを目指した。

景観再生のポイントとして，以下 2 点を挙げる。

（1）人の手でつくる新しい景観

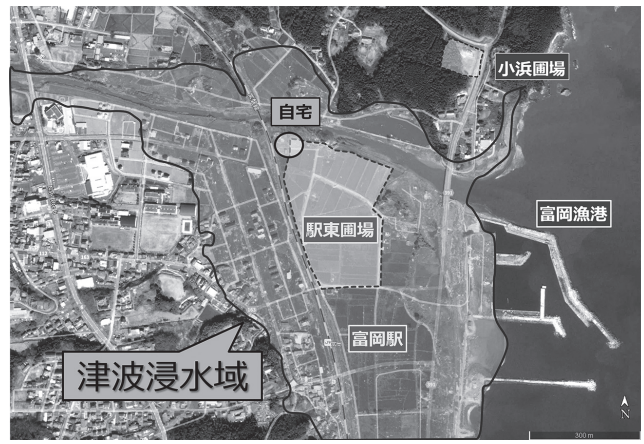
富岡駅（JR 常磐線）と海を挟むエリアに植えられた苗木は，季節ごとに表情を変える。

①春：新芽が芽吹く，②夏：緑の波が一面に広がる，③秋：収穫（収穫祭）と紅葉，④冬：整然と静まる枝と空のコントラスト。そして，ブドウは年々枝を太くし，圃場全体がエネルギーと地域の顔としての存在感を増していく。また，時間と共に，失われた風景ではなく，未来へ育っていく風景へと姿を変えていく。

（2）「記憶」の継承と「希望」の風景

震災の語り部として圃場に立つ住民の姿もあり，風景が，記憶と未来をつなぐ媒体となっていく。

図－1 は小浜圃場と駅東圃場の位置関係および津波浸水域を示す。2016 年に試験栽培として，丘の上の小浜圃場に 172 本定植したのが富岡町でのワインづくり（以下，とみおかワインと称す）のスタートである。町民有志 10 名が各々異なる避難先から 2 － 3 時間の移動を要しながらも故郷の地に集まり，苗木の定植・管理を行った。有志 10 名は，荒廃していく故郷の風景を少しでも回復すること，避難した人が集う環境を強く願い，方々からブドウの畑に集まった。避難先から無人の故郷に向かう途中，それぞれ複雑かつ重苦しい心境であったことと察する。

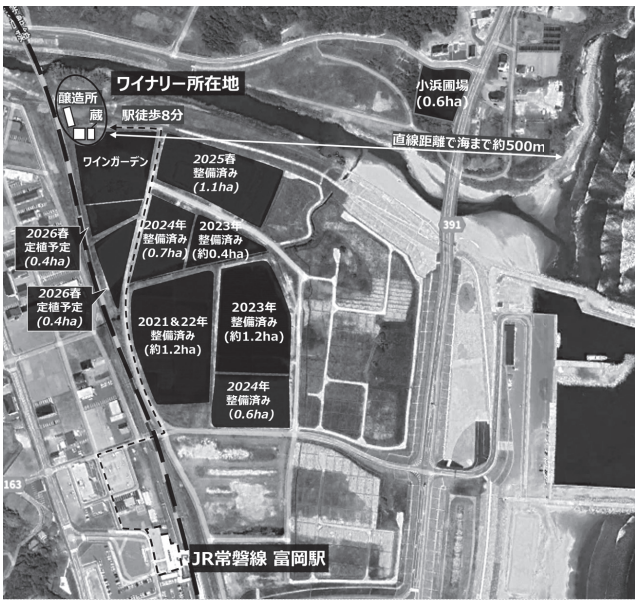


図－1　各圃場の位置および津波浸水域

その後，小浜圃場に 12 種類の品種のブドウを定植し，海の近くの気候や土壌で育つ品質を見極めた。2020 年 4 月には富岡駅前に駅東圃場の整備を開始し，津波で一度失った駅前の風景づくりに着手した。2020 ～ 2021 年度は富岡町内の復旧・復興の事業で発生する残土の処分地として土を確保して圃場（約 1.2ha）を開墾してきた（図－2）。2022 年度以降は，富岡町が所有する町有地（防災集団移転により地権者から買収した土地）を賃借し，約 5ha の圃場の開墾に着手した。広大な土地には約 10 万㎥の土が必要であることから，その確保のための本格的な調査を行った。その結果，2019 年の東日本台風により県内に浸水の甚大な被害が生じ，その後各地で河川改修工事が行われた。河川改修工事では浚渫や掘削に伴い大量残土が発生し，その処分地の一つの候補地として富岡駅前の農地が設定された。河川改修の残土は砂分を多く含んでおり，水はけが非常に重要なブドウの栽培には適していた。

図－2　駅東圃場の開墾のプロセス（2019 年 10 月～ 2020 年 4 月）

図－3 は 2020 年以降の駅東圃場のエリア毎の苗木の定植年を示す。2016 年～ 2020 年に小浜圃場に約 2.500 本，2020 年～ 2025 年に駅東圃場に約 13,500 本の苗木を定植し，苗木の総数は 2025 年に震災前の富岡町の人口 16,000 人と同じ数に達した。2025 年 8 月時点のワイナリーおよび駅東圃場の斜め写真を図－ 4 に示す。



図－3　駅東圃場の整備の変遷

図－4　駅東圃場ととみおかワイナリー（2025 年 8 月撮影）

ワイナリー（図－ 5）は，地域材を活かした木造建築で，2 階レストランは直ぐ脇を通る常磐線の車窓と同じ高さに設定している。電車そして乗客とのコミュニケーションも大切にしており，通過する度に来店客が電車に手を振り，電車からは警笛が鳴らされ，乗客も手を振るなど，それを思い出や楽しみにする来客も多くなっている。電車の乗客

図－5　とみおかワイナリーおよび 2 階のレストラン・ラレス

が後日来店するケースも増えつつある。

震災の時に自宅と両親の母屋は津波で流出したが，自宅の隣にあった蔵だけが津波に耐えて残った（図－ 6）。蔵は震災後，個人的に補修・保存していたが，ワイナリーの建設場所を自宅および母屋跡地に設定した際に，蔵の活用を検討した。ワイナリーと蔵は通路で繋ぎ一体利用し，蔵の 1 階はとみおかワインの 9 年間の取組みを紹介するシアタールーム，そして 2 階は津波で流失が免れた古い農機具を展示している。この蔵には“希望の蔵”と名付けた。

図－6　津波に耐えて残った蔵と改修後の蔵（希望の蔵）の状況

5．ワイン用ブドウ栽培活動を通じてのコミュニティー形成

ワインの品質は，ブドウの出来で 8 割以上決まると言われており，ワインづくりはブドウづくりであり，すなわち圃場整備とブドウの管理が最も重要である。ブドウの栽培は，草取り，摘芯，収穫，剪定等々，季節毎に作業が変化する。

上記の通り約 6.5ha の圃場とブドウづくりには多くの人手が必要になる。とみおかワインでは，2016 年の開始以降，積極的にボランティアの受け入れを行っており，表－ 1 の通り 2020 年以降の年間ボランティア参加者数は増加している。これまで，地元住民，ボランティア団体，企業の CSR や地元の小中学生などが圃場での作業に参加している。また，企業や被災者ツアー，公務員，学校関係者等の研修の場としても活用されている。

県内外から多くの方がボランティアに参加する理由は，ゼロになった土地を，周りから無謀と言われながらも，地域住民の手で少しずつ形作るプロセスに参加し，一人一人が復興・再生に直接かかわることの実感にある。ま

表－1　年間のボランティア参加者数（単位：名）

2020 年	2021 年	2022 年	2023 年	2024 年
395	473	722	846	1,118

た，公共工事とは異なり住民主体のため，お金を極力掛けず時間を掛けながら，地道かつ手作り感のある取り組みにより参加者に主体性と一体感が生まれることにあると考える。参加回数を重ねる毎に，新たなコミュニティーが形成され，地域への愛着が徐々に増していくこともある。ボランティア活動を通じて 10 名以上の方が県外から移住している。参加者の方から，「代表の夢そして実現をお裾分けしてもらっている」や「誠実に地域に向き合っている姿と少しずつ形作られる取り組みに魅力を感じた」などの言葉をいただいた。

7．100 年先を見据えた地域づくり

富岡町は，人口減少，コミュニティーの崩壊，超高齢化，風評被害，交流人口，特産品の消失など課題が多岐に渡る。とみおかワインでは山積する社会課題に対して，ワインづくりを通して改善・解決する包括的アプローチを実践している。

ブドウの苗木を植えることは「未来に対する投資」であり，1 年で成果が見えるわけではなく，10 年，20 年，100 年という長期性を伴う。とみおかワイナリーが描く未来は，①「戻る」町から「訪れたい」「関わりたい」町へ，②生業が育ち，景観が育ち，誇りが育つ地域へ，③風景が記憶を支え，未来を語る場所である。私たちの復興は，元に戻すことではなく，未来を創ることであり，未来を再定義することでもある。

8．おわりに

2016 年 4 月 1 日，無人の富岡町に集まった町民有志 10 名で畑を開墾し，苗木を定植したのがとみおかワイナリーの始まりである。周囲からは，「海の近くでブドウは育たない，ワインは作れない」，「放射能で汚染された土地でできたワインは誰も飲まない」，「人がいないところで商売はできない」，「避難先から通いながらの栽培なんて無謀」等々，スタート時に富岡町でワインができると信じた人はゼロに近い状況であった。周りから「できないシャワー」を浴びる度に，半信半疑になることもあった。ただ，無謀であると承知の上で，富岡町でのワインづくりに情熱を注いできた。約 10 年間，なぜ心折れずに継続できたか，問われることがある。まず，震災で荒廃が進む故郷を少しでも良くしたいと汗を流す有志 10 名の姿や思いが心の支えになった。そして順調にブドウの木が育たない中，徐々に集まるボランティア参加者の姿，とみおかワイン葡萄栽培クラブのメンバーの存在が，ブドウを育てる行為以上に，人の繋がりや徐々に形成される人の輪の重みを感じていた。さらに，全町避難を指揮して町民に寄り添い，富岡町長として国・県・東電との対応を昼夜を問わず全力でやり尽くし，亡くなった父の姿も常に脳裏に浮かんだ。何のためのワインづくりかを自問自答しながら，次第に 100 年先の地域の姿を想像するようになった。

世界で前例のない複合災害を経験した地域の復興・再生には，教科書や参考書がない。だからこそ，前例や既存制度などに当てはめるだけでなく，先入観を入れすぎず，本当に必要なモノ・コトを追求することが重要であると考えている。富岡駅前にこだわったのは，駅前は町づくりの一丁目一番地であり，その顔をどのように作るかで，将来の町全体の姿に大きく影響する。とみおかワイナリーの経営理念は，「真心を込めて，ぬくもりある会社と品格ある地域をつくりましょう」である。とみおかワインのこれからの歩みが，地域の品格づくりであることも常に意識していきたい。

最後に，富岡町は震災により多くのものを失ったが，ワインづくりを通じて新しい風景が創られている。それは単なる農業や産業でもなく，人と人，人と土地をつなぎ直す営みである。また，ブドウが育つまでに生まれる時間と関係性こそが，富岡町の再生を象徴している。とみおかワイナリーは，震災によって生まれた「空白」を，希望の風景に変えていくことを目指している。ワインという成果よりも，関わる人々と共に育てる時間こそが本当の価値であると認識している。

謝辞

本稿を執筆するにあたり，立ち上げメンバーの町民有志 10 名の皆様，とみおかワイン葡萄栽培クラブのメンバーの皆様，富岡町の地域住民の皆様，ならびに県内外から活動に参加された多くのボランティア・学生・支援者の方々，クラウドファンディングで支援していただいた多くの方々，復興庁，経済産業省，福島県，福島相双復興推進機構，富岡町そしてとみおかワイナリー関係者の皆様から長年に渡り貴重なご助言と多大なるご協力をいただいたことに，ここに深く感謝申し上げます。

補注及び引用文献

1）富岡町役場「県内外の避難・居住先別人数（令和 7 年 10 月 1 日現在）」